

---

# **ゼロの使い魔～元係長よ永遠に！～**

アンサバック

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ゼロの使い魔～元係長よ永遠に～

### 【Zコード】

N7282Y

### 【作者名】

アンサバック

### 【あらすじ】

落雷死した中年おやじが、異世界転生、とある人物に憑依した。

憑依先がゼロの使い魔の世界だと知った主人公は、自分の記憶している原作知識を頼りに、てきとうに物語を推理し、勝手な思い込みで行動していく。中年おやじ！ハルケギニアを逝くシリーズ第1段、はたして中年おやじは生き残る事ができるのか？・・・この作品は作者の練習作品です。また、作者の自己満足のため、ネタバレなどもある駄文になっています。それでも構わないと思う方は読んでやってください。

## 第一話（前書き）

こまやうって感じもしますが、投稿してしまいました。退屈な回想  
もどきですが、お暇な方は読んであげてください。

## 第1話

「信じられないよなあ、あの係長が亡くなるなんて…」

「ああでも、らしいつちや、らしいよな、落雷死だもんな、普通考えられねえよ」

「うう、僕、一生係長について行ひひひひて、思つてたの…」

「嘘つけ、おまえつー係長、半年も前に辞めてんじやん」

「ああ、ホント突然だつたよなあ…まさかの課長昇進か?なんて噂があつたつけ…」

「やうそ、それそれつーそれまで、ただのセクハラおやじだつて思つてたのに、急にだよな3年前、人が変わつたようだ」

「あれ?お前知らなかつたのか、係長きれいな奥さんと娘さん、事故でいつぺんに亡くされたの」

「うう、きつと喪しき埋めるために…仕事で、うう」

「そうだつたのか…でも懐かしいなあ、地獄の3年間だつたけど」

「やうだなあ…業績もハンパなく伸びたもんなあ…」

「ぐすり、でも今では…見る影もなくなつちやいましたね…それに課も無くなつちやいましたし」

「それにしても、すうじに参列者だな… 1000人はいそعدا」

「なんかアブなそうな奴らがいるかと思えば、絶対、ビジギの社長  
だってオーラ出まくりの人達もいるし」

「ああ、あそこに居るのは、名前は思い出せないけど某有名企業の  
社長なんだな、こないだ雑誌に載つてた」

「いつたい、どういう人間関係なんだろうな」

「ぐすつ、知らないんですか？係長、宗教団体入つてたの。遺言で  
2億寄付するつて、世界の為に使つて貰うつて…」

「「「2億つ…！」」

「しゃしゃ、ぐすつ」

「「「…」」

「コホンっ、しかし、遺言つて、イサ氣好いのか、好くないのか…  
それに信じたのかも微妙だよな…」

「ホント不思議な人だつた、都合悪くなるとすぐ、フツ、聞こえん  
なあ～、悪党どもの鳴き声はあ～、だつたもんな」

「あつ、なんか似てる…不思議といえ巴、絶対セクハラでクビにな  
ると思つてたもんな、俺…」

「せうそ、社内でも超ベッピンの女性社員の胸とかお尻あんだけ  
さわつて…嫌がられてなかつたんだよなあ」

「ぐすつ、係長には美学があつたんですね」

「美学つてお前つ……常にわけわからん、  
誇大妄想としか思えんエロ  
話しかしてなかつたじやねえかつ」

「まあ、もう亡くなつた方の」とだ、あんまり悪く言わない。それに、その女性陣も参列に來てるんだし」

「あ、ホントだ。秘書課の南女史、前島女史、それと高部さん、総務の近藤さん、水無月さん、えーと」

「うへん、社内で評判の、デキる女性陣達に見送られて、係長も本望つてといふかな」

「そろそろ、お焼香、僕達の番みたいですね。最後の挨拶にいきまし  
ょう、ぐすつ」

「あめ」

The diagram consists of three vertical columns of black dots. The leftmost column has 5 dots arranged vertically. The middle column has 6 dots arranged vertically. The rightmost column has 7 dots arranged vertically. All columns are aligned horizontally.

「とつ、…結局、一睡もできなかつた。まあ、それも仕方ないか」

綺麗な朝焼けだ。

これからの中『クランク』としての人生、未来を照らし輝かしてくれ  
たらいいのだが…。

幸い、それなりに原作知識はある。

それに、一晩考え抜いた?結果、オレは、このハルケギニアで生き  
ていくときめたのだから。

しかし、まさか自分が異世界転生、憑依するなんてな。

しかも、平賀才人である。

まあ、実際はどうなのかは判らないが原作での描写やイラストの記  
憶。

そして状況や服装でそういう事なのだろうと思つていい訳だが…。

正直、複雑な心境もある。

なぜなら、ひとつは純粋に、オレのスローライフを返しやがれつ、  
このつ、すつといじつこいつーである。

3年かかつたが精神的にやつと立ち直り、これからとこうといふで  
この現状…。

もつひとつは、あのまま何十年か掛けて、虚しく朽ち果てていく可  
能性が高かった前世の記憶があるからだ。

それに幸か不幸か、前世での自分の家族、友人、知人などの名前、容姿など酷く曖昧ではつきりと思い出せない。

それ以外はそれなりの記憶がある。

なんせ、自分が死亡する記憶まであるのだから…。

まあ、これは強烈だからあたりまえか…。

⋮

⋮

⋮

オレの死因は落雷死だ。

高速道路のP.Aで車がパンクしているのに気付き雨の中、応急用タイヤに交換してたのだ。

作業中ふと、空を見上げると雷雲が白く光った。

そして、一條の光がオレを斜めに貫きブリッカーアウト。

稻妻が迫つてくるときの体感時間はかなりゆっくりとした感じだった。

頭の中では、早く逃げようと命令していくのに体はまったく反応できなかつた。

意識を失う寸前、なんか小説みたいだな、とか思える冷静な自分が少し可笑しかつた。

どれくらい眠つてたのか、ざわつく周りの気配とそよぐ風、土の匂いや草の香りを感じ、覚醒感にみまわれた。

疑問に思いながらも目を開けると最初に飛び込んできたのは、青い空、空高くにある一片の白い雲。

明日もきっといい天気なんだろ? なあ、などと呑気に考えていたりもした。

冷静に振り替えつてみると実際、余裕があつたのはこじらあたりまでだ。

「アンタ誰?」とのかわいい声が聞こえたので起き上がろうとした時だった。

突然、頭のてっぺんから足の爪先まで、なにかになぞられた感じがした。

はつきりいってびっくりである。

おそらくアレはティテクト・マジック。

コルベールがオレに魔法をかけたのだろう。

そのおかげで、オレの新しい器官といつべきか、能力に気がつけたのだが…。

なんだ今のは？という疑問と同時に自分の体の中や周りに何か得体の知れない物があるのに気がついた。

体を起こし状況確認してみれば、目の前に異国の美少女。

周りには、同じ服装の少年、少女。

極めつけは、動物や初めて見る生物が飛んでたりする。

異世界召喚？体内にあるのは氣とか魔力なのか？しかも体外に溢れ出ている？

それに、視覚、聴覚、嗅覚が異常に鋭くなっている。

夢とは到底思えない。

視覚、聴覚に飛び込んでくる情報が、嫌が応にも現実だと伝えてくる。

平民、召喚など不穏なキーワードに頭が敏感に反応し、そもそも考えが浮かんでは消える。

はっきりとした記憶はないが、このとき原作通りの展開が繰り広げられられていたのだな。

混乱と思考の海に沈みこんだオレが現実に戻ったのは、美少女が目を瞑り、オレにキスをする寸前だった。

結局、ゼロの使い魔の世界だと確信したのは、お互いの自己紹介が終わったあとだった。

といつても、オレの場合は名前の記憶もなかつたので、クラードと名乗つただけなのだが。

本当はクラードとが乗りたかつたのだが、氣恥ずかしくなり、まあそうなつた。

雲になれなかつた男、というわけだ。

その後は、当然殴つて貰おうとも思わず、氣絶もせず、彼女の部屋まで一人で歩いて帰つた。

余談だが、オレの傍に落ちていた鞄はなんとかルイズにプレゼントする事ができたと言つておいつ。

鞄の中身を確認してみると、やはりノートパソコンだった。

まあ、オレの物でもないし、邪魔だつたといつわけだ。

たかが落ちてる鞄ひとつで、意外に時間と労力を支払わされた。

けつして、オレだけの所為ではない。

ルイズがルイズたる所以であらう。

それに、この時点での彼女は追い詰められていた?だけに許容範囲ともいえる。

なんにせよ、ルイズのキャラが原作と同じなのだといつ事に感動もできだし、安心もできた。

半信半疑ながらも鞄を大事そうに抱え、それでいて毅然として前を歩くルイズ。

そのうしろ姿を見ながら、さて自分の事をどう説明しようか？などと悩みつつ彼女についていった。

## 第1話（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました。3話連続回想もどうぞ  
なります。あと2話、退屈かとは思いますが、お付き合いくつ頃ければ  
幸いです。

## 第2話（前書き）

回想もござれぬ當日第一段です。  
才人とは違い、もし氣絶してなかつたら?  
まあ結果的には…

## 第2話

ルイズの部屋に着いてからが大変だった。

まず部屋に入り、偶然自分の姿を鏡で見た時だつた。

咄嗟に声を出さなかつたのは、田頃の習慣のおかげだらう。

なぜなら鏡の中に見知らぬ十代後半の青年が映つていたからだ。

これにはさすがに驚いた。

オレは年齢38歳、さえない中年おやじとの直覚があるからだ。

さすがに容姿の記憶が曖昧だつたとしてもこれくらいは分かる。

それが、鏡の中のオレは若くなつていた。

それにつきこよくなつっていた。

日本人としては男前の部類に、はいるだろうか。

服装も青いパークーに黒のズボン。

原作イラストに描かれていた服装に似てゐる。

この時ようやく、自分が平賀才人になつてゐるのに気がついた。

まあ、雷に貫かれて五体満足なわけ無いわな。

鏡を見ながら、じばりく呆けていたのである。

段々冷静になり、ネット小説なんかでもよくある展開じゃないか。我ながら、もつと早く『氣づけよなーなどと思しながら一矢ついていふと、殺氣を感じた。

横合いから、ルイズの右ストレートが飛んできているではないか。しかも、ゆっくつと！

ルイズの怒った顔にも一撃必殺がこめられているのがみてとれる。動体視力が良くなつたとかいうレベルではない。

まるでスローモーション映像のようだ……。

あの落雷の時に似た感覚をオレは感じた。

ただ違うのは、オレが普通に動けるところだ。

その気合の入つてそうなパンチをアッサリかわし、腕が伸びきつたところで手首を掴んだ。

途端に時間が通常の流れに戻り、オレは内心驚いた。

それでもなんとか、つんのめりそつと為つてるルイズの体を支えてやり、殴りかかってきた理由を聞いてみた。

ルイズが言つには、『主人様である自分が何度も呼びかけてるのに無視し続ける。

拳句の果てには鏡を見ながら一やついてる気持ち悪い使い魔にオシオキを…とのことだつた。

まあ、ある意味正当な理由でもあつた。

甘んじて受け入れるつもりはないが…。

とりあえず謝り、話題を変えようと呼びかけた理由を尋ねた。

どうやら、このパソコンとやらで異世界から来た事を証明してみる事…とのことだつた。

ぶっちゃけ、素直に従わない生意気な使い魔をなんとかギャフンと言わせ、『主人様と認めさせたいのだろう。

実際、オレは使い魔をする気はない。

使い魔のフリなら考へてもいい、扱いが悪ければすぐに出ていく…と断わり続けている。

かわいそんかなと思う部分もあるが、譲るわけにはいかない。

ただ、どうまでも上から目線のルイズはやっぱりかわいいつ…と思えた。

べつ別に、つつ、つ、使い魔になつてあげてもいいんだからつ…など思えてくる自分にも不安を感じていた。

パソコンはルイズにあげたのだから、使えるようになつてもうつ為にも本人に触りながら覚えてもらつ事にした。

これは、パソコンに限らず昔からのオレのやり方、覚え方でもあり、指導方針でもあった。

物を覚えるには、経験もしくは実体験に限る！

見るだけよりは、触れて、見よーである。

だがしかし、習慣とはおそろしい！

オレは人に物事を教えるのは得意ではない。

因みに教わるのも苦手だつたりする。

これは学生時代から治らない、一種の病気みたいなものだ。

口調がぶつきらぼうになつたり、突き放したかんじになつたりするのだ。

なんとかルイズを説得し、パソコンを開き電源を入れるとこまではうまくいっていた。

マイピクチャに入っているであろうサンプル画像を見せようとダブルクリックを教えていた時だ。

なんなく、口調が突き放したよくなつてしまつた。

そこから言い争いが始まり、格闘モードに突入した。

言こと合い罵り合つてゐる内容は、他愛の無い内容なので翻覆させて頂く。

ルイズのパンチやキックをしばらくの間、軽く捌いているうちにオレはある事に気付き冷静になつていった。

無口になつたオレに気付いたのであるが、ルイズも攻撃を止め、肩で息をしながら睨みこんだ。また。

しばらくお互い無言で睨みあつた後、ルイズが先に折れ、諦めたよう机に座りパソコンのマウスに手を添えた。

その後、3度目のトライでコツを掴み、簡単にサンプル画像を見ることができた。

結局、サンプルミコージックを聴いてる途中でバッテリー切れとなり、パソコンは使用不能になつた。

この時のルイズは落胆と怒りが混ざりあつた表情だったと言つてしまふ。

彼女にしてみれば、オレはただの平民だらう。

その平民の使い魔を、高価で珍しい道具をもつた平民の使い魔へと少しでも上方修正したかったのであるが。

貴族として、メイジとして劣等感に押し潰されそうだつた自分が初めて魔法に成功したのだ。

平民と分かりガツカリしながらも、それでも期待したい気持ちがあるのは人間として当然だろう。

まして人生経験の浅い十代の「ひら若き少女」だから。

それが文字すら読めない、使い方も微妙、意味不明な道具。

しかも今後まったく使う事ができなくなつた異世界の道具だと言う張る平民。

更にその使えないパソコンとやらが10万エキューもするなどと騙されたと思ったであらう。

この時めでたくオレが『平民の使い魔』から『嘘つきな平民の使い魔』へとルイズの中で認定された瞬間だつた。

鞄の中身を確認した時、パソコンを10万で買つたと適当な説明をしてるので嘘つきとはあながち間違つていない。

ただ10万エキューのくだけは、お互いの通貨単位の認識の違いによる不幸な事故だと思つてゐる。

草原で話し合つてる？途中でその事には気付いたが、説明するのも面倒ぐさくなり放置したのだ。

この後ルイズは怒りながら夕食、入浴にいくと告げ、部屋で反省でもしてると言わんばかりに鍵をかけて去つていった。

当然、オレはルイズを騙した罰として晩飯抜きにされてしまった。

しかし、ルイズはいつたい、何をしたかったのだろうか？

この部屋は当然、中から鍵を開けられるのだが…。

まあそれはともかく、このパソコンには最初から最後まで振り回されっぱなしだった。

いつたいどこまで祟られるのやら…まあしかし、収穫もあった。

オレの体内に流れている得体の知れない物の正体が解つた。

そう、それは電気だつた…

パソコンの電源ボタンをルイズが押したとき違和感を感じ、ジャレ合ってる時にソレに気付いた。

あの時、無口になつたのもバッテリーが残り少ないことに気付き、なぜ、そんなことまで判るのか？

また、オレなら充電もおそらく簡単にできる。

そんな思考に捉われたからだった。

しかし、この時のオレは平賀才人に無かつたこの能力への興味よりも、もっと深刻な欲求があつた。

それは、人間の誰にでも起こる生理現象、尿意をもよおしていたのだ。

そしてここは女子寮、トイレが有るか無いか分からぬいが、どちらにしても使用不可能なのだ。

女子寮から飛び出し、とにかくオレは人気のない物陰を求めて走り出した。

異世界の一つの月に照らされながら…。

## 第2話（後書き）

魅惑の女子寮トイレッ！作者的には、すいじく氣になつてたりします

：

### 第3話（前書き）

回想もじやれ第三段、元中年おやじ徹夜するひーの回。よひしければ、  
じひわいー！

### 第3話

なんとか小用を終え一息つけたオレは、このルイズのいない自由な時間の使い方を考えた。

まず夕食はルイズの宣告も含め今の状況では、もはや絶望的だらう。食堂の位置はわかる。

この学院の中心にあり、一番背の高い本塔の1階だ。

しかし、原作描写通りルイズのセリフが正しければ入室もできないだらう。

平民認定され、しかも若返つてゐる今のオレでは…

仮に食堂を抜け、または、裏口を発見し厨房にたどり着けたとして、どうすればいいというのだ？

夕食時のこつた返した厨房…

知り合にも居なければ、オレの存在すら知られてはいまい。

誰？お前、何？コイツ状態だらう。

その中へノコノコ赴き、自分の事や現在の身の上をつまく説明し食事にありつけるだらうか？

また、うまく事が運び食事をだされたとして、オレはそこで食事を

食べる事ができるだらうか？

厨房の片隅とはいえ、戦場と化した彼らの職場、聖なる領域だと思える。

その職場で忙しく働く人々の姿を田の当たりにし、ただ一人、食事を摂るなどと…

プロセスとゴーリイメージ、どちらもハードルが高いと思えた。

ひるがえって、入浴はどうであろうか？

こちらはなんの問題もなく簡単にいくのではないだろうか。

原作では2種類のお風呂が描かれている。

ひとつは、大理石でできたローマ風呂のようなつくりで、プールのよくなきさの浴槽がある。

その大きな浴槽に香水の混じった湯が張られ、天国気分が味わえる貴族専用の豪華なお風呂。

もうひとつは、掘っ立て小屋のようなつくりのサウナ風呂。

焼いた石が詰められた暖炉の隣に腰をかけ、体を温めながら汗を流す。

十分に体が温まつたら、外へ出て水で汗を流す、学院で働く平民用の共同風呂。

おそらく学院内で働く平民の人数は少なく見積つても200人は超えるのではないだろうか。

でなければ、この施設の管理、運営に支障をきたすのは容易に想像できる。

この施設に加え、ここにいるのは教師、学生、全員貴族なのだ！

その300人前後が暮らすであろう貴族達の宿泊サービス、それに警備、馬などや乗り物、はては使い魔まで…

その生活すべてのお世話をしなければいけないとなれば、500人いても不思議でない。

しかも水道設備もなければ、便利な電化製品もない、通信伝達手段さえも直にやるしかない。

おそらく今までの人海戦術を駆使するしかないだろう。

うーん、ある意味一大巨大企業だな…あつ、国営だったか？雇用の確保だろ？と、その時は結論づけた。

そんな大所帯であれば、入浴時間はバラバラで手の空いた者からどんどん入っているのではないか？

そこに少々知らない奴がいても、そこまで気にしないのではないだろうか？

また、マナーや習慣の違いが有つても、そこはリラックスタイル…あまり咎められない気がする。

と、こんな事をつらつら考えながら、人が居そうな本塔に向かつていたら気配を感じた。

前方に人影がひとつ、こちらに向かつて歩いてきている。

こちら風で言えば、距離にして100メイル以上は離れている。  
どちらやらオレは無意識の内に、体内の電気を広範囲に垂れ流しているらしい。

その電気がセンサーの役割をはたし、オレに気付かせてくれた。

と言つても、他人には気付かれない微弱電流とおぼしき物だが…

それにこの時は、やはり知らない場所であり、自分では気づいて無かつたが、かなり警戒していたのだろう。

勝手にオレの能力が発動していた。

それと、視力もかなり上がっていた。

月明かりに照らされているとはいえ、やはり薄暗かった。

しかし、この離れた距離でも相手の姿がはつきりと判つたのである。

その相手とは、眼鏡をかけた美人で巨乳のお姉さん、ミス・ロングビルだった。

表情はやや険しい、こちらを警戒してるのが判る。

流石は土系統のエキスパート、彼女もオレに気が付いている。

土くれのフーケの名は伊達じゃない！

どうも微妙なエンカウントになりそうだった。

オレの事を使い魔として認識してくれてなければ、不法侵入者扱いだつただろう。

彼女は秘書としても、とても優秀だ。

たとえ目的の為とはいえ、僅か2ヶ月足らずで人の顔、名前、行動パターンなど時間別に把握している伏がある。

おそろしいまでの情報収集力、分析力だ！って言い過ぎか、現代社会ならあたりまえかこれぐらい…

それに全員覚えるわけでなし、うん、普通だな、Bプラスで優秀な部類かな…

そういうえば、フーケの犯行は原作なら7日後、虚無の曜日の夜だったか？

ということは警備体制の確認かな？

まあそんなわけないが、ここに警備はザルだつて気づいてるだろうし…

お互ひの距離が20メイルをきつた所で、ミス・ロングビルの表情

が急に柔らかくなつた。

そして更に近づいたところで学院長秘書の顔、営業スマイルで自己紹介しながらオレに気さくに話しかけてきた。

やはり彼女はオレが使い魔であることを知つていた。

しかし、いつも表情が露骨に変わるとなんだかなあ…

前世ならあの距離だと絶対氣付かず、「口ロジと騙されてただろうなあ…

内心やつぱり女は怖ええ…びこの女優だよつーと驚愕してゐるのを隠し、初対面での無難なやり取りをした。

その後はお風呂に入りたい旨を告げると、彼女は快く了承してくれ、入浴場所にまで案内してくれた。

道すがら、ふと異世界などといつ概念の無い彼女ならどんな反応が返つてくるのだろうと好奇心にかられた。

それとなく、オレが異世界人であることを告げてみた。

結果としては彼女の仮面は崩せなかつたかな?

彼女は平民になつて4年目ぐらいだったか?

しかし所詮は社会人4年生、まあ最終的には大人な対応だったのは流石だと言つべきか。

一瞬だけ、キヨトンとした彼女のレアな表情を見れただけ儲けたと思つことにした。

サウナ風呂は想像通りだつた事と、オレの男の部分が想像以上だつた…恐るべし主人公とだけ言つておこひ。

味気ない入浴を終え、ルイズの部屋に帰ると、まだルイズはいなかつた。

これ幸いと先程の感覚を思い出しながら自分の能力の事について考えた。

基本的にこの電気は、オレの体から常に溢れ出ている。

まあ実際は垂れ流しだが…

この時は、人畜無害の誰にも気づかれない微弱電流、索敵ぐらいたくは使えるかな程度のものだつた。

これが魔闘氣とかだつたら、カイ ウ様みたいでなんかカツコいいのに…などとどうでもいい事を思つたりもしてた。

ここから思考がそれ、北 の拳の事を、あーだこーだ考へてみるとルイズが帰つてきた。

そして、使い魔の役目、役割を一方的に押し付けてくるのだった。

使い魔などする気のないオレは当然、原作知識を活かし優位に反論戦を開いた。

最期は養われる謂れも必要も無いから出て行くー」と言えど、とにかく今日はここに泊まらせてあげるーと上から田線。

お互に平行線のまま時間切れ、就寝タイムとなりルイズはベッドに  
お互いに寝入り始めた。

そしてオレは床に座り込み、今後の身の振り方の為にも自分の能力  
把握にしばらく努めた。

ルイズにバレないようコツコツ試していく内に慣れてきて、手足  
のよけな感覚でなぜか自由に操れるようになった。

新しい器官ができる直ぐに馴染んだ、といつもよりは、生まれた時か  
ら使い慣れたという感覚に近いものだった。

操り遊んでいるうちに、この電気を操る能力と呼ぶべきか、意外と  
使える反則級な能力であることに気がついた。

まず、体内から溢れでてる電気だが、オレを中心球状、いやドー  
ム状にかなり広範囲にまで拡げる事ができる。

基本、球状に拡がっていくが、地中には深く拡がらない、せいぜい  
2~3メイルくらいだろうか。

それはともかく、たとえば南の窓から見える森ぐらいまでなら簡単  
に収められる。

そして、収めた範囲いわばその空間内の情報がいつきに頭の中に流  
れ込んでくる。

まあ大雑把な情報だが、あそこに大きな生物がいるとか、向こうで小さい生物が飛んでるとかだ。

集中すればもつと詳しく解るかもしれないが、頭から煙が出そうなので止めた。

また指向性を持たして一方向にも伸ばせる事もわかった。

ちなみに縮小するのも簡単で、面倒臭くなつたら切り離せたりもできる。

それと、微弱電流だけだと思つてたのだが、オレの意思で狙つた所の電流、電圧をも変えられる。

しかも、なぜか魔法にも干渉できた…

面白くなり、指向性を持たして伸ばしたり縮めたりと遊んでいる時、今度は壁、天井、床などの違和感に気付いた。

とりあえず窓枠横の壁に直径10サント程の電気を貫通させて、なんとなく違和感を断ち切るように力を込めてみた。

すると、その部分の壁だけが違和感がなくなつていた。

おそらく壁には固定化の魔法が掛かっていて、その部分の固定化だけを破壊してしまつたとでも考えるしかない。

干渉できたといつても、まあこの程度なのだが、今のところは充分だと思えた。

なんとも出鱈目な能力に満足したオレは、2度目の人生を楽しく満喫しようと心に誓つた。

そして、当然こんな力を手にしたら、やつてみたくなる事が男には必ずあるはずだ……

男と女が密室にいるのである……

やつ、ちょっととした出来心、ルイズにイタズラ…能力を試してみた。

△△でよくあるHレキマッサージ、健康にもきっとこいはず……

彼女の敏感なところへ…

やがて彼女は…

熱いのだらつか? シーツをめくつ…

またどんな夢を見てるのだろうか? 自分の手で…

いつのまにか大きく脚を…

月明かりに照らしだされた彼女はついぶんと艶かしかつた。

最期に果てるときピクンッと仰け反り、満足したのかクテンっとなつた。

この時のオレは、スーパーハイテンションっ!

ベッドの縁にじがみつき、まさにルイズたん、ハア、ハア状態!

クテンつとなられたときは、危うくパンツを落してしまった！

寝言までシンデレラ…おそれべしルイズ！

この後のオレはやり場の無い衝動感におそわれた。

己の愚かな行動にしばらへの間、後悔する事になつたのはいつまでもない。

なんとか、荒ぶるムスコが鎮まるまで耐え抜き、今後の行動方針を纏め上げた時には、朝日を挙む頃、だった。

### 第3話（後書き）

つつ、ついに、クラードの能力が明かされたつ！……まあ、使い方間違ってるけど、この主人公で大丈夫なのか？

## 第4話（前書き）

やつと回想もござむ無事、終了しました。  
元係長クーラーの戦い？がいま、始まる…  
お暇な方は、読んでやって下さご。

## 第4話

南の窓から陽の光が差し込んでくるのを見ながら、この世界の未来、また未来の自分の姿に思いを馳せた。

ヴィットーリオ主導で起じられる聖地イベント…

そして3つの文明の融合、融和による風石問題解決…

大円団Hペローグ後のオレのゆるゆるウハウハなスローライフを…

まあ、単なるオレの憶測と願望だけなのだが…

結局一睡もせず、今日起じる出来事と自分のスケジュールをてらし合わせてみると、俄に学院が活気づいてきた。

さて、そろそろルイズを起じすとするか。

「ミス・ヴァリエール、朝だ、起きろー！」

サイトは毛布を剥ぎ取っていたが、オレは肩を揺すっている…

なぜならボディータッチができるからだつ！

「はえ？ そ、そつ……って誰よあんた！」

「なんだ、寝惚てるのか？ まったく、オレはクラードだ！」

「ああ、使い魔ね。そうね、昨日召喚したんだっけ」

「ミス・ヴァリエール、認識が間違ってる。使い魔ではない。それに、誘拐されたんだ！」

「…あんた、諦め悪いわね。それより、服

無言で、椅子に掛かった制服を手渡したら、ルイズはネグリジェを脱ぎ始めた。

「…あえず僅かながらも出るトロはでてる、乳おっぱいが少し、先づちよのポッキンはピンクだ！そして、下の…産毛だ！」

今しか見る機会はない…常にその覚悟を持っていないことチャンスを逃す…おやじとほやじふう者である。

「下着」

「…」

「セリのクローゼットの、一番下の引き出しにはこいつある」

今度はクローゼットの戸を開け、何度も掘んだ白の下着を手渡した。

となりで下着を穿いている、色気のない穿き方だ。

…ここや、まつまで色気のある穿き方でどうか？

「服」

「どうこの意味だ？」

「着せて」

「すまない、ミス・ヴァリエール……オレは脱がすのが専門なんだ」

「……あんた、なに言つてんの？」

「いや……とつあえず初めてだけど……挑戦してみるよ」

そんなやり取りをした後、ベタベタとボディータッチしながらルイズに服を着せ、オレ達は部屋からでた。

部屋からだと、キュルケが同じタイミングで部屋から出でてきた。そして原作と同じように、キュルケがオレをダシにして、ルイズをからかいだした。

そのうち、使い魔のフレイムも部屋から出てきて、なにやら白黒まじりにキュルケに紹介されている。

知識で知つてるとほこえ、フレイムはやっぱり迫力あるみなあ、なんて思いながらこいつそりキュルケを観察している。

スタイル抜群、褐色肌のキュルケ、そのキュルケの一番興味をそそられる場所といえば……やっぱり右田だわつ。

いつも髪の毛が覆い被さつてるので、右田がどうなつてゐるのか分からぬ。

なんとか見えないものだろうかとルイズの後ろでアングルが変わる  
ように動いているのだが、微妙に見えない。

キュルケが話をしながらも顔の角度を変えるのだ。

そんな行動をしてたのだが気付かなかつたのか、気にしないのか、  
オレを見つめながらキュルケが話かけてきた。

「あなた、お名前は？」

「オレはクラードだ」

「そう……クラードね……それじゃあルイズ、お先に失礼」

品定めするような眼差しを向けてきた後、そう言ってキュルケは颯  
爽と去つていった。

フレイムは後ろをちょこちょこと付いていっている。

その後、悔しがつてるルイズにオレ達も行かなくていいのか?と冷  
静に声を掛け、本塔に向かつた。

本塔の1階にある食堂に入り思つ事はひとつ、やはりデカイ!

そして食堂内には描写にあつたように、100人が優に座れると思  
われる長いテーブルがやはり3つ並んでいる。

学年を表す3種類の色の違うマントを羽織つた学生達が、それぞれ

のテーブルで歓談しながら座っている。

真ん中のテーブルの中間からやや手前、そこがルイズの席なのだろう。

その傍の床にオレのと思える食べ物、パンとスープ、いや汁が入った皿が置かれている。

しかし、皿が良すぎるのも困りもんだなあ… やはり、ソーシャルサイトと同じ扱いか。

まあ、食事事情も学院を去る理由のひとつにできるかもな…

「なあ、ミス・ヴァリエール、オレの皿がおかしくなったのか？ 床になにやら皿が置かれてるのが見えるんだが？」

「見えるわね」

「一応、確認で聞くが… まさか、アレがオレの朝食でいいのかな？」

オレは立ち止まり、テーブルの上の豪華な料理と床の皿を見比べてみた。

「あのね？」これは貴族の食卓なの。ほんとは使い魔は、外。あんたはわたしの特別な計らいで、床」

「なるほど… ミス・ヴァリエール、その特別な計らいとやらは必要ない。それに今後の食事についてもだ」

外で待つてると告げ、オレは振り返りもせず食堂から立ち去った。

腹を壊さないかと不安ながらも水場の水で餓えを誤魔化し、食事の終わったルイズと合流して、教室の中にはいる。

ルイズの隣に無理やり座り、教室を見渡せば学生と共にいろんな使い魔たちがいる。

カラスに梟それに猫、そしてモンスターとしか思えない使い魔まで、本当にファンタジーな世界にきたものだ。

それでも、タバサが居るのは予想外だ。

彼女にバレるとは思わないが、それでもやはり気にかかる。

それにもオレは、もうつつきタバサはシルフィード…今はまだイルククウか?の救出に向かってるものと思つてた。

食堂で見た彼女は白タイツでなく、白ニーハンだつた。

えつ!?外伝版なの?と一瞬焦ったあと、すぐにごどちうらであつても問題ないと直したのも記憶に新しい。

ここからゲルマニア国境までの道のり、そして時間をどれくらいかけたか不明だが追いついた時は夕方だったか。

とすればオレの推測では、7~8時間はかかったのではないかと思っている、最速で6時間だろうか?

推定追跡距離が最大300リーグあたりか。

北海道より少し大きいトリステインなら妥当な線か。

若干ゲルマニア寄りにこの学院はあるのかな？

うーん、このあたりが俄か転生者のキビシイところだな…

現代感覚だと、現チャリで6時間、300キロ走破つ！

……シンディな、それに時速50キロ、スピード違反で捕まるか？

そんなことを考えていると、土のトライアングル、ふくよかで優しい雰囲気のあるミセス・シュヴァルーズが入室してきた。

しかし、ミスとかミセスとか、ここは本当に面倒くさい、未婚、既婚女性でいちいち分けるなよな。

オレなりに直訳すると、人妻女教師シュヴァルーズまたは未亡人女教師シユヴルーズになってしまふ。

……ダメだつ、レンタルビデオ屋でレーベルのタイトルに騙されて即借りしてしまう自分の姿しか想像できない。

肉づきの良い彼女の体に荒縄が…

苦しそうでいて恍惚とした表情の彼女に…

不貞をはたらいているという思いが…

そういうあなたの始めを求めて…

自分自身を追い詰め昂らせてこく彼女に…

熟した…って、イカン、イカン、イカン…変な妄想モードに入ってしまった。

とにかく、やつぱりほんと、セスは思考でも練習しようと、やつぱり…

やつぱりメンデイからいいか、どうせ出でこく…

オレの目標の為にも第一ステップにあたるこの重要な場面で、どうでもいい事を考へれる相変わらずダメな自分…

ふと我に返り教室を見回せば、小学生なみのやり取りがあったのだね、注意を受けている生徒たちがいる。

しかし思つこんな場面とかがあるから、一次小説で学園扱いられるんだろうなあ…

小学生からエスカレーター式?みたいな…

学院つて、オレのイメージだと私立の大学なんだが…

IRIにて由緒と伝統のあるじこ国立の魔法学院なんだよな?

マサカ…オスマンの趣味?

とつ、また思考がそれた、とりあえずまだ大丈夫みたいだ。

とにかく今のオレのミッションは、ルイズに授業中に鍊金の魔法をぶつ放してもらう。

その時、オレは自身の防御と彼女に電気ショックを与えて、氣絶してもらひただけでいい。

その後は当然、教室の大惨事の片付けもせず、堂々とルイズを抱えて医務室に逃げ込み自由な時間を作り出す。

そして、空いた時間で何とか接触し、彼女を口説き落とすしかない。

オレには、午前中の限られた時間しかないと思つていて。

その理由はコルベールのおかげでガンダールブばれが起き、監視され始められるかもしないからだ。

その後は、陰に陽にそれとなく監視される羽目になる、見ている相手はそんな気が無くとも…

また、能力でモートソグニルなど使い魔たちは察知できても、遠見の鏡などマジックアイテムは気付けないと想つ。

そしてここではオレに、プライバシーの侵害は適応されないだろ？

かといってプライバシーを守る為とはいえ四六時中、気を張つてなどいられないし…

そんな思考を打ち切り、原作展開と同じになるようにルイズに話し

かけた。

案の定、ルイズは見咎められ指名されて、教壇に立ち鍊金の呪文を唱えている。

オレとシュヴルーズ以外は机の下に隠れている。

オレも自分の準備をし、いつでもルイズに電気ショック攻撃ができる状態だ。

そして遂にその瞬間、光と爆風に教室が覆われた。

オレは、すごい爆風にビビりながらもルイズを捕捉したまま電流を流した。

煙が晴れ、教壇があつた辺りを見てみると、吹き飛ばされたルイズとシュヴルーズが倒れている。

シュヴルーズはたまにピクピクと僅かに動いている。

……ルイズは動いていない！

あれ？あれれれれえ～……シンゾウガウゴイティナイ？

オレの能力は電気を操る、電気の流れが解る。

そして心臓、これは一定のリズムで電気を流し心臓を動かしている。つまり、心臓が動いている、動いていないなど瞬時に理解してしまうのだ。

「るつ、ルイズううううう！」

オレは叫びながら飛ぶようにルイズのもとへと駆け降りていった。

## 第4話（後書き）

たまご、はつあつて仕事をすみじくまわる  
みたかづー！それで、おやじクオリティーっ！  
なんのこいつ…せ

## 第5話（前書き）

やらかしてしまったクマーディーが、反省したふりをしながら、思索にふける？の巻つ！

## 第5話

とりあえず今、ルイズと共に、水の塔3階にある医務室にいる……  
よつ予定通りだつ！

ルイズに駆け寄り取り乱しながらも人口呼吸、胸骨圧迫、人口呼吸、  
電気ショックいわばAED代わりだ！

一発蘇生、まさに奇跡だつた！

心臓が活動し始めた後も、胸骨圧迫をする…

血液が止まつてた脳に障害が残らない為にも…

もう一度、マウストウマウス…の矢先、オレの体は浮かび上がつた？

レビテーションの魔法を掛けられたのだろう、ルイズから引き離された…

魔法を掛けたのは、騒ぎを聞きつけ駆けつけてきた、女性教師だつた。

冷静さを欠いていたオレは、魔法を断ち切りなんとか着地。

なぜ、邪魔をする！とすぐさま女性教師に食つて掛かつた。

その時、女性教師はキヨトンとしていた…

そのキヨト顔を見たオレは急速に冷静になった。

まず、ルイズの魔法が爆発し、間近にいた二人が黒板に叩きつけられた事。

その影響でルイズが心肺停止状態になつた事…

やむを得ず、自分の国に伝わる応急処置を施した事を伝えた。

そしてルイズが未だに、意識不明状態なので、医務室へ運びたい事…

それとルイズに何か羽織る物を用意してほしいとお願いした。

女性教師はオレの事を疑いの目で見た後、それでも、傍にいたメイドに指示をだし段取りをしてくれた…

とりあえずルイズにはパークーを被せ、彼女の露出している部分を隠した。

本当はマズイのかもしれないが、自分が運ぶと強硬に言い張り、横抱きに抱えて医務室まで運んだ。

なぜなら彼女の気道確保と規則正しい呼吸、そして心臓のリズムを聞きたかったからだ…

はあ、失敗したなあ…

それにもしても、よくまあこんな俄か救命隊員がわりのシロートで復活したよなあ…

しかしじゃったとはいって、高電流ながしたら、そら普通に死ぬわな

やつぱ、高電圧でないとな、スタンガンみたいに

ホント、奇跡だよな……これが所謂、主人公補正的な強運？

……まさかギャグ補正？

そういうや、ギャグ補正っていえば、サイトって頑丈だよな

それに病氣ひとつしないし……めでかつ！不死身？

重症の連続にもかかわらず、ケロリとしてたし…

何より、あれだけせつない処を蹴り上げ……想像したら鳥肌たつた！

たしか、この医務室だったよなあ……

ティファニアとベアトリスのHピソードの後、窓ぶち破って飛び降りるのって……

オレは、窓越しに覗き込んでみた。

……普通に死ねる、なんてつたつて3階だもの。

まあでも、テファのミクルな部分を揉んでいい思いしてたんだし……

あれ？でもサイトもあの時、死の予感かんじてたような？

……まさかっ！これがホントのミラクル補正？

しかし、あの女性教師の穢むよつな目、結構口えたなあ…

まああの感じだと、魔法をオレに破られたって気付いたわけではな  
んそうだな。

どつちかってこうと、女生徒に淫らな行為をした変態痴漢野郎疑惑  
…

あとは、平民風情がつ！てな感情とこうとこりか…

まつ、当然つちゃ当然か…

ここには心臓マッサージとか人工呼吸なんてないだろ？し、魔法で  
なんとかするんだろ？？

知らない人間からすれば、気を失ってる女性に、キスして胸まさぐ  
つてる痴漢行為にしか映らないわな…

それに平民がそんな技を公開すれば、魔法を齎かす方法として異端  
かどうかの微妙なラインかな…

ブリミル教か…

ある意味ブリミルの呪縛…

まあ、ブリミルの名前だけが勝手に歩きまわっているが…

どちらかと言えば、少数民族だったマギ族の恐怖心ゆえの産物だろ  
うな…

ブリミルの時代、いわばヴァリヤーグの王達によつて支配されてた時代みたいに逃げ回るハメになるなど…

おそらくこの、政治体制つてヴァリヤーグがやつてたのを模倣してるだけなんだろうな…

首の挿げ替え、ヴァリヤーグからマギ族へと…

それが延々と6000年、愚民政治を…

まあ、愚民でなけりや統治できないわな。

特にブリミルを失なつた少数のマギ族が10倍以上を…

しかし、ブリミルは偽りの生を、いつたいどれくらい送つたのだろうか？

なんせ、エルフだからなあ、使い魔が…

それにブリミル、フォルサテ親子一代でつて可能性も高いし…

うーん、わからんつーまあどうでもいいか…

まあどちらにしても、初期のブリミル教つて、知識、技術に対してはかなり神経質だったのではないだろうか？

特に平民階級の人達を厳しく取り締まつたのだろう…

平民は学んではいけない、団結してはいけない、それに武器に対する規制、あらゆるものに対しても…

そして、ブリミル教会が平民の学舎というわけか…

いつしか、技術を磨くこと、力を合わせて試練に打ち克つこと、自分達ならできるという氣概すら失なってしまった…

そうして第一、第三のヴァリヤーグの芽を摘んだというわけか…

6000年、人間に無力感を与え、抵抗力を奪い、隸属化させるには充分過ぎるほどの時間だ…

しかし6000年があ、上手い年代設定にしてくれたものだ…

こうすれば、風呂敷広げやすくなるもんなあ…

例えば、6000年毎に大災害がおきるとか…

そのたびに、一族内に救世主みたいな連中が現れたりして…

ブリミルの時代より更に6000年前、約12000年前だと地球の伝承、言い伝えなら、超古代文明滅亡か…

ムー大陸、アトランティス大陸などの伝説…

これらの大陸の末裔とかだつたり…そういうや、これはエルフにも当てはまるか？

それに6000年前、地球では紀元前40000年あたりで、突如と

して高度文明が現れたんだよなあ…

チグリス、コーエラテス川の間、下流域あたりに…

謎の多いシュメール人が興した、シュメール文明！

確認が取れる人類最古の文明…

やがてメソポタミア文明へと発展、いや吸収されてしまう…

そして、この文明が日本を含め先進諸国、西欧諸国などに受け継がれている…

自然に抗う文明、自然と戦う文明、自然をコントロールしようとする文明という意味でなら…

いつ考えるとやっぱリシュメール人で、なんとなく…てな展開かな？

しかし、そうなるとヴァリヤーグが支配してた地域つて、ハンパなく広大だよなあ…

少なくともこちらでの、イラクからハルケギニア全土か…

アルビオンが微妙で北欧っぽいあたりはどうだったのだろう？

しかし最大でも、ここイランあたりからアラビア半島、ハルケギニア全土ではないだろ？

まあ、アラビア半島があつたらだけど、なんせ、イベリア半島がないくらいだからな…

なんてこつたいつ！リーガ・エスペニョーラがつ…

それはともかく、イランあたりと考えたのは、一いつでは、ロバ・アル・カリイエがあるからだ。

そのロバ・アル・カリイエの位置が地球でいえばインドあたりではないだろうか？

なんとなく、ヨーロッパの人達からの東方つて、イメージ的に印度かなつてな理由だが…

そして、6000年前のロバ・アル・カリイエもそれなりの文明を築いているだろつという勝手な推測だつたりする…

でも、いまではきっと…

もひひとつのアラビア半島できつたのは、やはりエルフの存在だ…

サハラと言つからには、どう考えてもアフリカ大陸だろつ…

例えば、この世界のアフリカ大陸の砂漠化が地球と違つていた…

そして、エルフがエジプトのあつた辺りにいたら…

仮定の話だが、エルフの防衛線は突破できないだろうな…

エルフはどちらかといえば、防衛戦の方が得意なのではないだろうか…

エルフは精靈の力を行使する、その土地にいる精靈と契約を交わし  
強力な魔法が扱える。

ルクシヤナも言っている、ひとつつの都市を吹き飛ばすこと、やろ  
うと思えば簡単にできると…

ただ、サー・シャガ言つていいたように、争いに使いたがらない描写  
もあつたのでこれは個人的意見なのかどうかは判らないが…

まあ、そのエルフが拠点を築いて防御に徹したら、生半可な攻め方  
ではくずせないだろうな…

その土地そのもの、いや自然そのものが敵として立ちはだかる…

まして災害クラスの魔法すら有り得るわけだし…

ハルケギニアの人間が、ガリアの東端にあるアーハンブラ城を取り  
戻しという描写がある…

オレは軍事のシロートだが、これくらいなら分かる…

エルフが戦略的に無意味と考え、退去したのだろう…

その理由としては、その時代あたりで、船の性能、操船技術が向上  
したと考えればしつくいく。

それまでの聖戦は陸路で大軍団を送り込む戦略をとつていた人間た  
ち…

しかし、聖地は海にある！

そして、聖地には場違いな工芸品がある…

それを盗りに人間たちは空海路を使って、船でくるようになった…

エルフ達にとっては、自分達の住んでる所から、ずいぶん離れた場所で防衛する意味も意義も無くなつた…

ロマニアって、たしか位置的にギリシャだつたよな…

どうにか往復もできるんだろう…

それに、ハルケギニア版どこでもドアもあるしな…

そつ考えるとギリシャだと位置的にいえば最前線か…

ロマニアの国の在り方も古代ギリシャに似てるし…

何より、ヴァリヤーグって呼び方が、古代ギリシャのバルバロイやバルバロスなどの呼称にそっくりなんだよな…

そしてサイトの夢、リコードの魔法で見せられた、ブリミルヒヴァリヤーグの戦い…

あれつて古代スバルタやアテナイの人達と20万、50万とも云われてるペルシア軍との戦いをモチーフにしたんだろうな…

エルフはブリミルが巻き起こした大災厄後に空白地帯になつた土地に進出したのかな?

エルフが何処に住んでたのか謎だが、今は描写にもあつたハルケギニアの東にある海洋都市…

そして、聖地はやつぱり、地球と同じ場所なんだろ？

まったく、北欧神話を隠れ蓑にいろいろ謎を作ってくれるから俄か  
転生者には、やつぱりわからん！

裏主人公のアイツなら、きっと知ってるんだろう？…

くそっ！そんな事はビリでもいい、それよりも左手のルーンだ！

やつぱり消えとらんがな、残つてまんがな…

ひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひ

ジョセフが死んだ後、シーフィールドがフリゲート艦諸とも自爆し  
た描写はたしかに微妙だったな…

アレはミヨズニートニルンの能力使つたんだあ程度に読み流してたし

…

ん？リーブスラシリの能力ってわけだけではないって事か…

それにしてもアノ野郎つ、ホント悪辣だよな、たくつ…

しかし、このルーンはホントに呪い級つて、までよ…

オレの能力で……、まあ、いいかあ、面倒くさい…

とりあえずこれで、虚無が死せども、ローンは消えずと、てきとうな名言みたいなのはわかつたし…

でも実は時間の経過と共に、経年変化とか酸化とかして錆びてきたら嫌だなあ…

さび止めスプレーとか無いだろうし、有ったとしても定期的に体にさび止めスプレーって…

うん、やっぱり固定化の魔法かな？

さてと、そろそろ行くかあ、ルイズもとりあえず心配なさそう。それに、いま目覚められてもこまるしな、身動きとれなくなつそうで…

あとは、医務室にいる人達に任せて、オレは本来の任務にもビラせてもらひ…

決して忘れてたわけじゃないっ！……たぶん？

## 第5話（後書き）

次話はついにつ！アノ人にアタックつ？

## 第6話（前書き）

今回は、クラードくんがなけなしの知恵を使つてきつかけ作りに頑張りますが…

## 第6話

つつ、遂に、やつて参りました！本塔5階、宝物庫前に…

しかし、描写にもあつたが、目の前にある鉄の扉はデカイーとにかくデカイ！

そして、鉄の扉には門が取り付けられ、更に門にも、大きな錠前が付けられており完全防備になっている…

う~む、このおつきな錠前を仮に開けれども、扉開けられないよなあ…

そつかつ！オレの左手には、たたり神からの呪いがあるじゃないか！

あ…  
あっとアシ 力のよう…

あっ、でもアシ 力は右手か、それに呪いも広がらないし…

おバカな思考はとりあえず置いといて…

武器を手にして、この扉をどうにかできるか微妙などいろだな…

それにしてこの錠前、鍵穴デカすぎつ！

鍵穴の中、丸見えつて…

しかも、メチャクチャ単純な構造だし…

まさに開けてくれと云わんばかりだ、流石はファンタジーってじ  
るか…

でもこれって、簡単に錠前破りできるよね…

見えるつー見えるゾーー

あのマチルダに、ロケランパレゾントして、嫁ゲットした未来のオ  
レの姿がつー

そんな妄想でテンション上げると、人の気配を感じた…

階段を見上げると、ロングビルさんだ…

フツ…けつ、計算通りだ！

「あれ？…」じんじゅは、ロングビルさん

「あら、あなたは…クードくん、じんじゅは。どうしたのですか、  
こんなところへ？…学院長にでも？」

「いえ、時間が空いたので…学院の探索でもと思つてプログラミング  
たら、この大きな扉があつたので」

「そうですか…」これは学院の宝物庫になりますから、クードくん  
は…あまり近づかなによつてしませんとネ」

彼女は、オレを気遣つよつて、やせこく微笑みながら諭してきた。

なるほど、ここで立たれると自分の目的に故障をきたすんですよ

ね、解ります、メガネのお姉さんっ！

「やつぱりそりですよね…今のオレって、平民でしたっけ？それにこの錠前、簡単に開けられそうだし」

「えつー…？」

「いや、だから簡単に開けられるだしょ、鍵なんか無くても…マズイですかね、この話題」

「い、いえ、大丈夫ですよ…クラードくん、それでどうして簡単に開けられると思つのですか？」

「さつさ、鍵穴覗いたら単純な構造でした。これ位の平たい棒があればおしなら簡単に開けられますよ」

「さつ、さつですか…ちゅうじよかつたですわ、クラード君、ちゅうひとお姉さんのお仕事手伝つて下されるかしら…」

そう言いながら、彼女は杖を取り出し呪文を唱えた、おそらくサイレントの魔法だろう…

「ええ、かまいませんよ…綺麗なお姉さんの頬みならハハハッ」

「フフ、そんな事言つても、お姉さんは騙されませんし、何も差し上げられませんわ」

いえいえ、アンタが成功報酬ですから…

その後、彼女はヨロサントべりーこの鉄の棒を、一つ鍊金して渡してきた…

しかし、まつ毛を鍊金つて、いいのかよー！

そして、予想通り簡単に錠前を開ける事ができた…

といつても、結局ロックの魔法解除するのに、電気能力を使つたわけだが…

バレないんだよな、コレが…

あとは、門はレビテーションで、扉は念力の魔法で軽々と開き、宝物庫の中へとすんなり入った。

宝物庫に入つてからオレは、脇見もせず前を歩くロングビルさんにておとなしく付いていつている…

まあ、キヨロキヨロして何かを物色してゐるよつに思われたら嫌だしながら…

…ウソです、すんません。彼女が歩くたんびに揺れるんです！

プリンツプリンツで、その豊満なお尻がつ！

田を離すなんて、そんなバカげた選択ができるはずがないっ！

しばらく進んでいたが、彼女が急に立ち止まつた…

おそれく見つけたのだろう、破壊の杖を…って、オレ、どんだけ尻  
ばつか見てるんだ？

見てみると、細長い箱の上に、ロケットランチャーが置かれてある…

その前には、文字の書かれたネームプレートと思われる物もある…

破壊の杖とでも書かれているのだらう…

きっと彼女は、ほくそ笑んでいるのだろう、オレから見えない  
が…

その後も、進んでは止まりメモを取るという事を何度も繰り返し宝  
物庫を出た。

オレは宝物庫にいる間中、喋り掛けたりせず、おとなしく彼女の後  
ろで仕草などを観察した。

まあ、メガネをかけた知的なお姉さんに見惚れていたつて感じだ…

それに、ヘタに喋ると墓穴を掘るハメになるかも知れないからな…

そして、仕事中の人に話し掛けるマナー違反もあんまりしたくない  
しな…

おそらく彼女は、最悪の場合の逃走経路、ついでに盗めそうな品、  
それに対する警戒や使い途など考えただろう…

しかし、つこでに盗むのは勘弁してもらいたいなあ…

怪盗って呼ばれるならターゲットのみ、なんかコッチのほうがカッコいい！

宝物庫の扉を閉め、門を取り付け錠前に鍵をかけた。

鍵をかけたといつても、もうアン・ロックの魔法で簡単に開くだろう…

これでオレの役目もオシマイかな、あとは彼女を口説くだけっと…  
食堂のある1階へと、二人で降りていきながらアピールをしてみた  
が、返事を濁された。

フツ、あたりまえだ！このオレに出会って間もない女を、口説き落とせる才能などないっ！

それに結婚したのも20年近く前だしな…

何より、なんで結婚できたのか自分でやら謎だからな…

あとは彼女に語った与太話と姉御気質、それに孤児属性に期待かな…

まあオレは、孤児っていうより迷子だよな…

それも世界をマタにかけたって…あれ？人生の迷子…？

まあ、もつどうでもいいか、それより、オレが語った与太話というのは…

一つめは、オレが田舎のある旅の途中で誘拐まがいに召喚とやらで  
拐わってきた事…

ちなみに、田舎とは自分の妻になつてくれる女性達を探しており、  
その妻たちと幸せな人生を送る事になつてたりする…

二つめは、月が一つしかないとこに住んでいた事…

三つめは、帰れそうにはないが、べつに何処であろうとも、自分の  
目的は遂げられるので、近いうちにこの学院から旅立つ事

簡単に言えば、こんなところかな…

1階に着き、食堂手前で彼女とは別れた。

別れ際、彼女に一日後旅立つ事を伝え、旅立つにあたり調味料を少  
しわけて貰えるよう頼んでみた。

それと、迷惑でなければ時間が空いた時にでも文字を教えて！無理  
ならしようがないかなと言つておいた。

しかし、どうしよう…このタガネみたいな鉄の棒…

結局オレが持つたままなんだが、この犯行道具…

あれ？これはもしかしてヤバいかな？

ヘタしたら破壊の杖盗難事件の犯人に仕立てあげられる可能性もあるな…

オレが旅立つた後、破壊の杖が無くなつてゐる！？てな事にでもなつたら、真っ先に疑われるよなあ……

と、とらあえず、この鉄の棒処分だな……

そうだつ！裏の森にでも捨てに行こう！

「はあ、しかし腹へつた…。なんでオレが…」

愚痴は言つまい、「己が選んだ道だ！」

「どうなさいました？」

人の気配は感じていたが、まさか、このオレに話し掛けてくるとは…

振り向くと、大きい銀のトレイを持った…シェスターが立つていた。

なぜ？おかしい、このタイミングで…

世界の修正力か？…バタフライ・エフェクトつ、そういう事か！

「あつ、いやつ…なんでもない」

オレは驚いた顔をしてるだらう、しかし、彼女の視線は左手に注がれている…

鉄の棒を持った、ルーンを刻まれた左手を…

「あなた、もしかしてミス・ヴァリエールの使い魔になつたつてい  
フ…」

「ああつと、クラードでいい、それよりかわいいメイドさん、お名  
前は？」

「かわつ、しつ失礼しましたー！」で、奉公させていただいてる、  
シエスタつていいます」

「そつか、シエスタつて言うのか、かわいいね！それと、残念だけ  
ど間違つてる…オレ、使い魔じやないんだよね」

「え、でも…召喚の魔法で平民を呼んでしまつたつて…噂になつて  
ますわ」

「ふ〜ん、噂ね…しかし召喚かあ、応じたつもりも無いオレからす  
れば、これつて誘拐なんだけどね！」

「誘拐つて！そんな事、いまのを貴族の方にでも聞かれたら、大変  
なことになつちゃいますつ」

「大丈夫だよシエスタ、そんなに慌てなくとも、それにオレ（グラ  
ウ）…」

「…もしかして、おなかすいてます？」

「…いや？」

根性のない腹のせいで、いろいろとダイナシになつたがオレはある

ことを彼女に告げた…

そして食事を断り、困惑しながらも心配そうな表情をしたシエスタと別れ、森へと向かった。

## 第6話（後書き）

次話は、森の中での食料調達とクラードくんのダメっぷりをカミングアウト？

## 第7話（前書き）

腹ペコクマードは果たして食事を食べ事ができるのか?の巻やつ  
!

## 第7話

シェスターと別れたオレは、学院の裏にある森へと食料調達にきている。

食事を断り、彼女に告げた事によつて起きるかもしれない変化の事など、今のオレにはどうでもいい事だ…

「フハハハハハ～、雑種の身でありますから、この森の王である我の前を横ぎるとは、万死に値する…王の財宝！」

トスッ…。

鉄の棒が地面に刺さつた、なきない音だ、しかも、この至近距離で…

「え～いつ、雑種め…おらあつ！」

トスッ…。

おじい～ちつ、ぴょんぴょん、ちょこまかと、ウサギめつーくそつ逃げられた…

「おいつ雑種つ！興がそがれた、見逃してやる…ビリへなつと行くがよいつ！」

…なめくせつてるな、このウサギつ！

逃げもせず、またオレの周りをぴょんぴょん跳び回りやがって！

「やめだっ！ やめだやめだあー、じんきくへじょー！ ……けくへじょー！」

完全体だつたらあー！ のセリフをのみ込み、オレはその場に寝転がつた。

やつぱり、オレに向いてない！ 金ぴかは無理だ！

ます、指が鳴りん！ ペしゅつだ！ ペしゅ！

それにオレ向きのアーチャーっぽいえば、やつぱりアレだな、あの赤い奴。

あれ、ん、なんだつたつけ？

ん、と、たしか…不器用なイキ方しかできない…性技の味方だつたつけ？

特技が…個室決壊！ 無限の性生！

…ん、コッちだつたよな？

それともコレ、AVのパロディ物だつたつけ…ん？

そうだ！ アーチャーの呪文つて、なんかカッコよかつたよな、オレ的に当てはめてみると…

体は電氣で出来てゐる……も、キターつー。

血潮は酸で心は鉛……なんか、バッテリーっぽくなつたけど、まあいいか

幾たびの戦場を越えて今は無職……はつ、半年前に辞職したんだよなあ  
ただ一度も結果が出せず、ただの一度も評価されない……いつイヤな  
記憶だなあ

彼の者は常に独り狭い部屋で安酒に酔つ……だんだんムナシさが募つ  
てきたゾ

故に生涯に意味はなく……たつ、確かにっ！ クツ

あつと体は、電氣で出来ていた……ダメだつ、ダメダメすぎるつ！

なんかもつ、じつでもいいやつ、記憶もじつかになつてるし……

それに、電氣系つて学校とか職業を連想して迫力に欠けてるし……

うへん……やっぱコレかなあ『ライトニング』『ゴルベルのおひらか  
んもいつてたしな、うん、そうじょつ。

いまだに逃げずこじる、ウサギの方に田をやると、なにやら赤いもの  
を啄んでいる。

んつーあればイチゴか？

うーん、なんか季節が違つよつたな、しかし、あの赤い実は…

まあファンタジーな世界だ、そんな事もある、うん。

…わざいや、シルフィードのヒピソードでそんなのがあつたな。

なんだつたつけ？変な名前のイチゴ…

そうだ！・苺だ…

カエルイチゴって、そういうわると、ビートなく形が…

腹が減つてゐるオレは、無心で実を摘み、パークーに包めるだけ包んで、学院へと帰つた。

鉄の棒は、あのイチゴのある草むらにつ本突き刺したまま残してきました。

当然オレは、草むらに背を向け一度も振り返りはしなかつた…

おかげで遠回りするハメになつた…

学院に帰り、女子寮の下にある水場でイチゴを洗つて、おいしく1

人でいただきました（笑）…

一口めはやはり、勇気がいる！

オレは、この身体は不死身のサイトの体だつ、心配ない!と血口暗示をかけ、かぶりついた。

かぶりついた後、まいうと叫ばなかつた自分を誇りに思つ…

腹が膨らむと、やはり余裕がでてくる。

シエスタとのやり取りの、その後に興味が湧いてきた…

出会うハズのないシエスタに声を掛けられた時、さすがにオレは恐怖を感じた、世界の修正力かと…

その後すぐにバタフライ効果に気づき、取り乱さずこすんだのだが…  
まあ、ギーシュとの決闘イベントを回避できる今では、杞憂だつたわけだ。

あの時は、イベント回避したくて行動しているオレがイベントを消化しないと物語が進まないのかと誤解した。

そして、シエスタがなぜ銀のトレイを持つているのかが何となくわかつた。

案の定、ルイズに食事を持つていっていた、とシエスタから確認もとれてゐる。

シエスタは厨房つきのメイドだ。

そして、学院長室へ食事を持つていく事も多いはずだ…

まあ、シエスタばかりではないだろうが…

今日みたいにコルベールが訪ねてきたり、急な仕事で学院長室から出られなくなったりして…

ん? オスマント、仕事なんかやつてんのかなあ…

話がそれたが、原作でサイトと会った場面は、間違いなくそのケースだろ?…

しかしオレの場合は、それを手配するロングビルと一緒にいた…

ロングビルも食事の時間に気がつき、学院長達の食事の手配をしないと、と言つて食堂に向かつていたのだ…

彼女と別れて僅かな時間、それに当然オレは、メイドが来るとしても食堂側からだと…

そして、食事を運んでくる人間が、わざわざオレに話し掛けてくるとも思わない。

それに本塔入口側からやって来る人間は、食事を摑りにくる学生達だけだと思っていた。

だからあの時、訝しく思いながら振り返り、そしてシエスタを見て驚いたというわけだ。

オレは、初期の学院内で起るイベントは、能力把握とルイズや学

院内の人達との人間関係向上と認識している…

この学院を去るかと思つてゐるオレには、ほん必要のないイベントだ。

食事を断わったのも、ギーシュとの決闘に巻き込まれる確率が高いのでイヤだった。

ギーシュに負けるとは、まったく思わない…

ガンダールブ無しでも勝てる、今のオレなら…

なにがイヤかといえば、まず、田立ちたくない！

それに、勝った後の事を想像してしまった…

ヴェストリの広場での決闘…

野次馬的に群がる学生達、その中に立つギーシュとオレ…

そして決闘が始まり、体感時間の変わったオレが、ワルキューをすり抜けギーシュの目の前へ…

その間は一瞬、誰の眼にも留まらないはずで…

ギーシュを一発殴り飛ばし、倒れたところへ降参を迫る…鉄の棒？  
…鉄の棒つー？

そう、オレの手には鉄の棒が握りしめられているであら…

犯行道具と疑われるかもしねれない鉄の棒が…

そして、勝利後の厨房にいるマルトーのオヤジたちがオレの事をこう呼ぶ…

『我らの棒』と…

……なんて卑猥な呼び名だろ？

仮に、100万歩譲つて厨房内だけ容認したとしよう、そして、それが拡がる…

その後、オレが街中を歩いていると、たまたま、この学院関係者に出会い事もあるだろ？…

その時に呼ばれるのである『我らの棒』と、たとえ人通りの多い場所であろうとも…

それを聞いた貞淑な貴婦人、淑女の方々はきっとナニ一力を想像し顔を赤らめるであろう…

……イヤだつ、イヤすぎる！

無理だつ！受け入れられない！

そんな未来の自分の姿を想像してしまった。

だいたい、オレはこの世界を救う英雄になりたいわけじゃないつ、  
ましてや魔王にも！

それにこの国を、いやハルケギニアを救うとか変化させるのは、やはりそこで暮らす人達の仕事だろう。

オレは、ちょいと手伝っただけだ…

それにオレには変な能力がある分、現代日本より今のこの世界のほうがいい！

そして、笑うことなかれ！

オレがやりたいのは、ハーレムの構築、いや両手に華かな？…

そのハーレムでも、ライオンの社会構造を模した、ライオンのオスポジション…

オレにとって、都合のいい群れだ！

現代日本ではできない、いや、できなかつた、えなにおやじであつたオレの当面の目標だ！

原作知識というチートを使ってまで行つ、おバカな目標だが…

ライオンの社会構造はすばらしい！

そして、やっぱライオンのオスはいい！

仕事（食事の為の狩り）は、メス、子育てもメスがする…

オスの一日は、食つちや寝、食つちや寝、子供と戯れ、たまに吼える。

そして番いとなつたライオン夫婦は、食事も摂らずに一日に200～40回も夜の運動会に励むつて、もつ夜だけのレベルじゃないな…

そう、種の保存本能、一族の繁栄の為にも無限の性生、いや無限の性欲か…

ライオンのオスとは酒池肉林なのだあ～うわつはつは～…イカ  
ン本音がつー?

とつ、本音ダダ漏れな事を考えてゐるひかり、風と火の塔の間にある中庭、ヴェストリの広場にやつてきた。

「ひかり覗いてみると、西の隅…西やがる…」

金髪にワインをかけられたようなシミが浸いでるシャツを着た男が…

夕日とまではいかないが、西に傾いてる陽を見ゆるよつし、二角座りをしたギーシュだ!

おそれくアノ感じだと、ひびくフランだらなあ、2人の女の子に…

あの背中を見せられる男（敗れた勇者）に声を掛けられる程の丈夫ますじゆおではない、このオレは…

ジットと叫ぶメイジであるギーシュ、それ以上近づくのを止め、オレはしばらく彼の背中眺め続けた。

さまざま事を想像した後、オレはヴュストリの広場からそつと離れた。

さらばギーシュよ、偉大なる先人、君の野望は潰えた…

が、しかあし、このオレが君の意思を受け継ぎ、いつか必ずオレだけのハーレムを築くと、胸に誓いながら…

哀愁漂う背中がひとつ、寂しく残る広場を跡にした。

ルイズが女子寮に帰っているのがライトニングで分かったオレは、そのまま女子寮へと向かっている。

しかし、あのギーシュの感じだけでは、はつきりした事は結局判らなかつたな…

シエスタはちゃんとオレの忠告をきいてくれただろうか？

シエスタとの別れ際、オレは占いと称して彼女の顔に受難の相がでていると告げた…

食堂内に薔薇が見える、それと床に落ちている小瓶、これには絶対に関わらないほうがいいと…

そして、これは貴女だけでなく、貴女の知り合いにまで波及するであろうと…

……一体、どこのエセ占い師だ！

それにしても、ルイズだけは何故か判るんだよなあ…

これが虚無と虚無の使い魔の絆の所為なんだろ？

それにオレがハルケギニアになにかと理由をつけて居残りうつする、この気持ちも…

あれ？ 確かルイズの傍にいる時だけ発動する的な事、タバサが言つていたような…

うーん、わからん！

普通に考えても、姿の変わった今のオレでは元の世界には戻れない、それこそ戻り方すらわからない…

仮に戻れたとしても生活が成り立たない…

戸籍も無ければ金すらない、家族はもういないし知人も分からぬ。

では、サイトのいた世界での日本はどうだらうか？

おそらく帰れるだらう、とこよりも、ここにしか帰れる場所はない、サイトなんだから…

しかしだ、これは実はオレが行きたくない！

サイトの記憶がまったく無い、思い出すり無い…

当然、両親、友人、知人なども分からぬ…

所謂、記憶喪失状態だ！

そして、一年以上は行方不明扱いになる、ご両親が搜索願いをだしてゐるからな…

そこへ、ひょっこり帰ろうものなら、社会的に大問題になる可能性がある…

まあ、考えすぎかもしないが…

そして、サイトのご両親という最大の問題が残つてゐる！

もうオレのなかでは、彼らを一生騙し続けるしかないので、などとほとんどあきらめている…

まあ、ウダウダ考へても始まらない。

どちらにしても、離れて暮らす事になるだろ？

もやもやしていた部分を多少なりともすつきりさせながら、女子寮3階、ルイズの部屋の前まできた。

そして部屋に入ると、オレの帰りを待つ、落ち込んだルイズがいた…

## 第7話（後書き）

次話はクラードくん、ルイズを慰める?  
しかし、実は…

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7282y/>

---

ゼロの使い魔～元係長よ永遠に！～

2011年11月27日22時50分発行